[illegible]集 [illegible]

新宮圖書
[illegible]圖書
へ5
1977
6

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]哥

[illegible]集[illegible]巻十

1977
6

玉海集付句巻下

戀之部

待宵はわけもやらうまや待むらん
さめて曲なしさよあらしりのめし　貞徳
酔てこそ花川さかつきもいさゝめ　月
かゝ乃あかさいかりゝ人あし
よめいりし九献をまいりそふすよ　月
恥かしさうなのめ房さかつき

もらはんとてあちて後の中垣り　月
寺の物よしきハ無にそりし
美人とハかましの乞まあか抱を　月
繪よハ小町をうしろむけせよ　月
あさましや神といふと乳母よるさう
坊主あらしをさそありく人　月
まろ弟子にあらふといふもあふや
すいよきられいおもたうらなひ
田辻よ出て今かゝまちぬへし　月

えんまやく汁をこしらへてまつ
俳乃あふめしをくふをとおかせられ 月
秋てらあちかなかるめしつき
我を君まて猫くとまりを忘の席 月
穂よまき後すりこきれをと
浅茅生ようハるりうちのそりて 月
そのこ志のふ小野もれしのハち 月
そるくと小ゐふてやかちえ
かね乃中ふそ忠のひとりげつ 月

三井寺さしておちてりこき
物くるひ腰ふハあふつき目ハなみだ 月
寺ある花乃なをてさかしき
とめハそれ暁まても沸尾らひて 月
旅すてハあつまも胃も張枕
扈従小りのゝこさらふ為道
おちこちく生けき坊ちのゑつつひ 月
小葛もかく傍鷹乃巣の屁ん
人たらり靴もよむとき抱ハ布と

汚くひらちらてきらんをせられ安
まはらちよつゐる沖を洗ひ子 同
あそし御くしをいつかすれん
まうかをうぬかまくせくちらせ 同
恪氣してや虫ハ歯かし爪の跡
淀野よりむさや縄のらひらふ 同
香爐をもすけあふ女まいさらひま
むかし文渚の流ハさひかるそ 同
ふれしきすりの三條古釘

うかつかハ男るけら君かからみそて 同
よ所さくらせて菜入とそう跡
傾城よ志まさひて蓬广かさ
みやまかいつけよこりた恋風 同
新枕今まま涙こさうて娑婆行し
隣よま志るや留守乃つる比不識 同
恪氣こと昔の小殿みまうこと乃 同
名家の派　謗せし内よ
あはれ月よ名をハたちぬか

入道ヶ姫塚にまよふ秋の夕くれ　同

勇月にしのふ清性寺庵ん　同

先師態

なさけもえしもたくかけまくや　和州郡山都護　云成

物来のよろハくめちと待くらし

あふみくもわするゝけふし

こゝ塀のたゝきいやしき寺の窓に　同

おかんくる夜を参らすそてひく

足になれと抱や寐すくおかすなん　濃州山崎　空哉

おかる夜の月かと君の御出まて

うしミ川まて乃ちらり在原　同

川まゝ子す屏風に出る村のみち

御息所乃すまる男にしむ　同

上人ハ雲の月をさき抱れりひ　同

汗ヶ涓ヶのこふえれかゑん

いとまふとまらふ力を捺もちて　同

心おしミ言に判者の付そひて

やミわろハたゝ流によきいミ霊　越後柏崎　日柳

居まゐくとうくなりなり

かほひとの別まよつま風にこれて

播州三木住五百屋 寛政

愚判

立やまらひて人をとゝそまて

辻占とさいて定めん猶の道

井世染惣母 栄春

さよあらまてとられぬハ謎

戸川あめ乃そつしふりや下氷常

郡山池田氏 正式

髪つあるろ此ふうき井戸ハさ

皆おとん流めら礼しより初ぞめそ

曰

たゝひよ目ひ川ひかれぬる袖

琴乃音に袖をいとせて思ひ行し

曰

それ乃あとゝふや乃至法界

悋氣して源氏をも若手頭の君

曰

恋ひおうの寐屋の戸口よたゝすそ

あく一太刀もし孫らふまおとゝ

春宵

なさけ足ふかし鹿ハつめかし

松つゝく茶碗乃湯つけ下されて

児玉三郎右衛 貞利

あたさゝしまさハ君乃ありさ海

かりかてかゝるやお菓乃ますまさけ
越前福井松岡氏 方竹

あゆむするをみまゝハかり袖
踊には氣もうかれぬを伴ひて
播刕姫路[illegible]氏 吏云

何度か人をたらしあかせ昼
すひかねハあまりお情なみかみて
摂州□□左衛門 保次

うましと我はなひく青柳
春風のたよりに文の来りして
勢州松坂常念寺 宗順

小松原のかたみいとしと古文よ
昆布のきれらしき目よと言人
摂州大坂住 當心

かきられつもかつハ大あ絶ん
渡るやひさすいゝ海の文ならん
摂刕三田住 重香

化生乃ふきされ珍しき姉
白粉をしくろ老女乃寄添
敦賀中村氏 正次

婿も祖父も膝をたてゝより
たいて寝る火桶またかをつんきして
播刕姫路[illegible]氏 吏云

神木まさへうけハかなくき
樹乃あれをたてらんとやおもひん
但州生野住 安永

くもめかお地をおりよきんささ

浦島乃とろくとしたる絵をみて
五十稔んすかこひも箱の間
越前福井伊古氏 良卿

耶鄲乃枕絵をしもてまゐる人ハ
萩をみてもをこりそすれ恋心
播州三木五百屋 寛政

通をうしなふ久米乃仙人
多ふしめて朽ミ王る湯行平ふ
濃州山端氏 藝残

作家豊後乃立居いとしさ
但州生野寺田氏 豊重

麻地酒醉めら舞の袖よれて
十四五からハ道乃せん清く
但州生野長野氏 業秀

若菜よ月まハせめてとりまぜ
江戸矢野氏 古掌

年よるハこそはわつさうり
黒こゝろやむら気乃ハ染ましや
勢州富田廣慶 兼吉

悪頭乃子をよろこひ乃ちる
今年より書まぜろむしろしき
越前福井山本氏 重直

こゝめからちおしきも捨すちひお
三忠

子をもちしをけつ中乃おそれさ
たゞふつさ姫やろむしとときぎ
後妻うちハみつもたれそろし
越後柏崎 杣都

おさんとすれどかさもやられ涙

こがれてもときさねのかゝる袖もぬるゝに　若頼屋　政信

根ミして文をよそやき

遠国に我おとこめか居とまり　同

餘所に呼ミ兄の殿とかゝる約束

若後家をたてゝハ年を送りか袖　吉地氏　可頼

紙ひらく志ミつくちぎの上鶏の露

形見のおふさ目にあてゝなく　同

月まつとひらけハ風乃入宿に

まゝやちよ初に露乃かゝり袖　同

朝夕の波を枕に少おきて

いと海路もふ船頭乃泊ま　同

ふくかりしおとゝ今ハいとしき

よりちくハ空にまかせさる心かく　季吟

よろさハ袖てもおきてもおまそひそ

去おもひけをとらひかせそひく　同

かゝとまうつけわむ染め風のそて

おもひのやけとなをさともかし　同

さくりよりつかれし　句当

きぬ〳〵よふたゝひ内侍のさそひすて　同

あふつるましとまさすわらち恋

うるそきハ老女そうのつきんきみて　同

玲本やつま紙すてゝゆくらん

松江乃水くさきこそ心なれ　同

命すてんそ恋乃道りも

迚口をすゝて音をともかきちきれ　恵佐

あそひくらせとうかぬ顔つき

たゝれめふたふれて涙ハ悔しかり　同

ひあせふましゆふころ雲はき

とりもちるね念者まふきつれ　限光

芝ハおくのるまれハ出つく

こおろしハりちゝ乃月つくひ

薫風呂の内てもましめ揉をしめ　同

へ道乃娘ハころたくして

くるハね恋のま幾代過ましし　正章子十歳　元次

おもふ中ハ秋といふ字も忌やらん

哥ふと萩ハよふてやるまひ　貞室
いつまても猫さやあハぬ鶴のふ
ふのやきれこそたこあすも寄消　同
癒くハりしのやまそにわ乳母
まつ出文よりし我つゝひす添　同
さし家しろ力ワきさ清し
かふき太夫持ことをかしハをまことふそ　同
いかりぬる太力の下まや俺ねらん
淋活なしあしてかへまも癒き史　同

鮮へハゐ手すとすると隠されし
自然居士まや似す添若僧　同
志よへ時ハなすみてことをし生
つめられし袖さへ人乃かことふそ　同
つめりたくハなさけするさ人
いやふくハいやとそて暇お出しけれ
すへき格氣をせすハえ堪し　同
川おくろつ手す秋乃袋来
もしとせれむりつかゝへちゝろめきそ　同

只いそれとゝし聰乃文月哉
かへせや実の成我ヶ刷ひ田　月
風流ふ戸なり性をもかけ後し
こされうしとやおりふ六君　月
ひきさしてよしく志ゝをつく琴
こちへなひゝひそち乃えや枝　月
何定めてり志けくめさるく
嬉沈よをとこ済親事ハお笑ひや　月
葡行もふゝぬ月ハふてさすり

稼しても妃とめすや玄宗　月
をのつゝ湯風呂をせ稼ふたる主
病後の国ハよせしとやさまそ　月
そひねしよ汗ゝく汁をそこれて
さそくすこさよひ乃むけ云　月
稼めら月よハいうひ抱れるひ
穂乃つちをみきりてやめす　月
文字ゝすおわくゝこ川玉章
かゝす先のさ稼こんと逃路もるて　月

神祇

満作な取勢も祈禱の故ならし
領内にます神のあつたさ　貞德

愚判

釜乃なりやう不審なりけり
海中に有と聞ゆるさひ川家　同

立けるる使者ハ奉幣乃ため
流されてまた住よし乃御遷宮　郡山池田氏 正式

棹と所乃なく舟にて見への所
山まの谷のハ名をいそられて　但馬生野中嶋氏 安永

同とまつしめる氏家乃うち
お神楽を神子乃男かおやし　摂州大坂住 政武

まへめる鷹乃絵ハかくらく
八幡よ絵馬神楽ら来らせて　吉地氏 可頼

かるるしを掛かとみれハ梅の枝
釜ハ釈迦なくて天神乃像　泉州堺住 成安

渡唐乃舟をかまり立なり

一
天神へかくは絵馬に念入て
なやめるとみて抱かぬ産前に　　恵佐

まつり乃くる夜立て後悔
まつりの場そふへ流りけは　　同

けよすゝ鴨乃神主いさかひて
わくしこもうひ喧嘩口論　　武州江戸住　古尋

祇園会に馬廉若ともあつまりて
神佛さんへ札入りなは　　摂州大坂井上氏　蘇之

あさあひのまゝり袋を拵へて　　当住　近政

深草乃やしろに雉もまいりて
わくゝの陸すゝ神酒のかはらけ　　季吟

氷きぬ色越前紙におむひ
足羽乃宮なれ月乃鮮口　　春宵

お中のむしとめに音になく
かいやそれやしきのひ息をたきつへ
かちより参りうらすな乃宮　　良室

筥縫りしもる御舟さまさまり
備前や七社の神に粟乃飯　　同

釋教

涌り出れハ池乃涼しさ
優婆塞ゟ頭巾も袈裟もぬき捨て　貞徳
ミなはむ田面乃鳫れ法なして
寺領とるれ所見よし乃ゝ秋　同
やりたる小袖を返しこそすれ
是居士人商人ゟ返付て　同
散銭や昔ハありてつもるらん

ほとけをのせし舟そなき所　同
極楽ハ大水出ると蓮ふみて　同
めしの調義ハなうね俺すさき　同
道意れしとおもふや膳の毒ならん　同
先樓乃修理せよや禅僧　同

先師點

一門ハ扇のなりにあつまりて
宇治てやとりし頼政乃跡
あをりに魚ハすさまと裏乃月　山端氏　萃哉

俗からおもひすまし　三箇月

日吉乃宮より普請あるは法
よらん庵乃志やつまた慕ぬ

紀州住日方氏　貞臣

越後柏崎行寺　日桁

愚判

歯をくろくてハ拙もいまれす
坐禅するや樹上乃雲のさすらん

作者名

八十年あまく法ハ露乃君ぞや
さてしたらとさける法華経

元真寺まや秋も法後

京都若氏　定良

猿沢乃水此月くむ採鏡よ

限光

暦見て吉日えらぶふともなし
雑行　雑修もませぬ称ん子河

日

ちらひ乃上より何かあるべき
一筋よ弥陀乃名号唱へなん

勢州廣瀬氏　兼吉

お慈悲みのせて舟へ渡し舟
一念ふかのさし称ろふ様施のお

播州幸田氏　正舎

よしあしをよ申称んふ河
我みても久しき後生称ひまそ

勢州松坂住米川　吏交

南無阿弥陀佛〳〵　春宵
かけし額をおしへしよむ誓願寺
ゆふ丹波乃国乃百姓
栗乃木比くらへ乃舟よ棹さして　郡山池田氏　正式
山をまろせかしたハすさまし
庄を流す金銭ハ月乃よあくふ　同
寺方乃ふきやかなりて里佛す
くしくの為よ風呂をたてそゝけ　同
条乃継野乃道るる南方　同

順礼乃うけおさらくや一番目　同
二番目かようえふ熊く　紀乃屋氏　時秀
順礼の通飯をさし紀三井寺
紀三井寺ふし気り泊まん　摂州大坂堤山氏　保友
順礼の札を一枚うちそめて
我寺へかへりするをみつるぞ　青池氏　可頼
山つえ旅徒さくうをそ流り経
あるけなく池の波風吹よそく
昆陽野をとるまし山ふし比貝　同

色恋乃因果をおもひや旅秋　春宵

法乃師よおもひやる夢乃手枕

人乃袖をすりへそてまやくるれ　勢州松坂住米川　吏交

拾ひし数珠ハ主ふやらそや

墨染衣姿より紅葉つき

数珠をくりつゝ袖をひき侍く　越後柏崎住　松都

出家とや契りをこむる中ならん

子をもちしおける中のあはれさ　同

発心ハおくれましのうに年を経て　良信

捨りハうくの侍乃袖

信雲といひて門々を廻り　丹波福知山横氏　吉英

朧月契りおく袖ハ蘆

荒行ハ内侍乃うき此御祈祷ゟ

あるそうまそるわる身の果　但州生野住　業秀

名聞を捨しけしま此修業あり

雲乃こねかとのおる人あり　但州生野中嶋氏　安永

年毎此冨士禅定ハ未乃夏

暁乃明星ハちらちらと出　紀州和歌山住　良辰

六角堂や建立乃比　恵佐

あはれさうわふさる柳風ばかり

佛乃ためふ上がうちしき　同

末世ハ長きをと移とをしれ

佛前乃卓よさし添露のあし　紀州廣瀬氏 時秀

かふろハあまたと女人禁制

禁制よりの初高野乃山道ふ　同

きよふ人ハいかも絶世の御新堂

高野乃山ふた川添日暮　貞室

一とせふ六ひ来まするすくあしや

条まぢわさハ多し　聖霊　同

貪りなりてもち命ハなし

方むのさことふ去ハ世にやめて　同

けふ指数をすゞ後り庭

福備とさけるハ菱窓の師ふて　同

心ちよけふひつかりさるとうき笠

めてたう顔をうけ出山ふし　同

ちくさやうもかりと孫の後世

かゝさ流すうしれなゝれのちらし宴　同

歩くと象乃鼻を八振立て

普賢を拝む　炸壺乃新　同

音すれは露もあらしの吹やあり

魔の来迹乃蔦そ覚え　ゝ涼　同

一粒もたくふ出来ろたのところ

身にしめて礼すれ舎利や数来麗　同

心理乃志るしを刹の玉垣ふ

草宇のや除き出家　新文　同

毎日あゝ乃水をすそく気ん

僧都をやさうとく拙あす神通　同

乞八諸國を一見乃僧

六尺ふあまふ柱杖もうちひく　同

あやしくも嵩をかくしてまふ持そ

達磨やかりふかくれましまず　同

述懐

分限なとゝ富れ亭主ゝ自慢して

やま馬子ともよ引出せといふ　貞徳
舎隠へ老耄りてやゝまゐらん
身ふしめて朧朧のよや知ぬらん
とものりたるそくらくりすり　同
茅屋乃中をもいそきす苗かよて　同
一らゝすらねかれやうそ何
むまれつき純な心又老てく　同
寺かに此和と義女乃こそれ体
命をいふ不孝なりことたすらて　同

愚判

なき跡をとふ袖乃ふ便さ
まかりきら濟ぶりた身を賣て　越前福井山民　重直
かつきかりうらず服をとそら体　伯州倉吉居民　重久
我親をころし针を又との〻
縁ふ来ろなさけをようこひて
後乃親をもしたるふ劣持さ　播州三木池田民　友松
いかれ月ふ又一刈より年めくれ
うききの尤の王乃おふう世乃中　貞室

哀傷 付無常

あすからハあふてひ御目にかゝるまひ
よく付ていよ旦乃経　　貞徳

さひしく風をかよする霊宮居
折くとをなく霊乃まふ霊

死人のや生るゝ人もましからん　　同

愚判

子れかゆかさハ死ぬる跡まで

横笛乃寝んころなりし若衆か　　春甫

ひよこくとよる雀れせつなさ　　武州江戸平野氏　古閑

さや病人の死脉あちまち
なと猿との中てこそあまた　　郡山池田氏　正式

ろうてま川和死期ハなふ乃酉の刻
いまふへきハきうくに色れ道なら　　濃州山城氏　養哉

ゆゝしき物そ葬礼乃供
年乃られく松しくまれ

すく成し人ハいとしや有かなる　　摂州大坂住　當心

茨門の浚渫をしへうちめし　同

たふむけもうけて暁ひ露り

君か御墓ありそく氷鉢　恵佐

ちらしと落る木葉をかささん　越前福井氏　塞童

なみたはくれてひろふ白骨

済ふらうと念仏の声

死したまはあふくみをすさ川　青地氏　可頼

あされはの見ゆる池の氷きえ

身とるけしなき風の稲の風にかれるを　荷類屋　政信

松山燒あまれまはこゝに　貞室

捨おりて見ゆるき袂むさぬき衣

天人の世界もさのとうらやます

めてふきことゝ見うしいかしき

嫂へふ似よ薬場の白小袖　同

ついそうふ昔地の香を打拂ひ

墓所や月にかれの野送り　同

人くひおろ月は尾をふる

くさむらにかくむや秋の鳥部山　同

雑之部

宗祇法師旅行の時五位の
鷺とりやらんと前に寄り給ひ
けるにあるじの挑とこ白襷
まきたりに出てけいめいし
されは御座に

里乃名はあんかきくけこまいれ鷺に
とゐふ義もしらしまいらしに

宗祇

あるじの挑とこ
あゐら鷺をささて布をまいらせ
哀にとく鷺をやせしと
うや

作者不知

名所はいのうち
天神もはなして子をやおもひめぐ
小野あたりへ川乃ほとりし

貞徳

西陣ようれ河原このひかえて
安居院あたりに紙を持らん

同

ひとり〱小野まいりをうちまもり
出し治オり連歌うけと给　同
云すてはあさりゐせし　内
里立てさわミ渡らぬ燕乃尾
ちしかた利をやも川の入道　同
岩丸をさまたうくふ悪灵
まけもすく祖いふやうな渡の舊
日本はあやしかうく人乃池
開寺乃かん頭さかく月乃影は　同

大津馬ともつかむ々うさ　同
和三河乃道こそ肝精なりけれ　同
もとのまゝ依さら馬をつゞて
かへさりやさ徒いそゝさ出川へ　同
いかめして葬はむくゝしちぬらん
もなしの罷は花しけの名そ　同
すりさりとなりなてゝ駄鞭
大事のあらはひんうらまくら　同
同菜を合せてそゝや持五郎　同

せんぢしよりに一盃ハ乃絶ん
茶なるてハゝ熱氣乃さめぬべき　同
よそ果たとても汗ハ出るらし　同
かりん乃かへ冷とぞ見つけたなるぞ
袋にハ術冷やきめしやお冷　同
かうりしき湯ならて立つくろ茶碗　同
栗乃末枝もとに大きな大なるて
礎乃うしらをかゐ冷やめす人　同
石すゑのそてなるおもひさ行然たら　同

さえつれる多ね茶一斤ハ志家椀
書籍のこゆる宗乃行とし　同
織初しとおりゐ猿若の猿仕人
たのもしれみふそしめてそハ冷　同
あくとりも後ハまつりん氣色まて　同
よめをとりめる宵乃騒しひ
小麻をくりへた小猫かめさてく　同
簾よりこめもさこかれをさし出て
鼬ハうりやすめ冷　古安　同

むく〳〵と毛せん抱ゝ持あけて
日ミすや去れ中に住ら錚　同
人の中みも眉乃多さよ
むつひあひ一日をうや引ねらん　同
かうをよりつをし待ふ久り
薫抱をたくんと原や画すらん　同
晨明のこ冷何集乃院
今ハたく幸度も多ゝね煙煙　同
まちつくさへさしより前の夜まで

共をいれ久すす町の焼亡　同
見や明石の入乃乃ゝて
引さうも毒走とすゝ播磨鯖　同
又まて毛抱乃骨やゝむらん
おそろしき虎狼をうひ画て　同
匂賤ゆるすころたゝなさき　同
尉との鬚の長橋渡り来て
一せいと今うたふ高砂　同
中原とかく文ハ正月

音信を郷かしこれハ錯ふりして
一にさりあ御夕立乃雲
かゝちちて太鼓ら川引と神鳴て
ひやうしちうとひとつくる菜種
山河乃舟を櫓ておすまへ孫そして
鷹揚へつまそてい川御右筆
空ふてい山川乃名をおりえ塔
寄枕ゝをたゝうなりくれ
かちてハゆゝぬ蓬葉北志海

童部ととを丹次中ふやの世つらん
あゝやところふなゐ乃ゆゐころ
うまふ御しあるかとすれハおまり
志たんへいさけねとこ乃扇船
かろゝしと扉ゝ添霜へひさまさそ
壽ひん乃代ふ屋うたんやすゐ
氷白とそ氷をいそく俺すきた
うまひな磯乃さとひやいろへ添
鹿革をうゝふ力乃そゝうて

身乃色も黒くみゆるは小殿原
あさうこまめや菓子すらん
かりそめよ付る名をせうらせすて
まそへ茶磨をうしてくやしき
縫ものや織帯や旅急ぎて
襷をせんりかく旅をとり子
小鬢よやわら字なりすまる茶
逃ても神ものせいでうまかね
おもき鵜いつく纏やいかなかん

此里ハ浪子乃おりき神のその
うたやおうちもいけ小息よなる
鮑のすみやけ土毛もうき妻いふらん
を川もとゆひや志めてゆひぬる
老さんしからいさひと宮ひて
君たり忠あるむりし思りん
誰か筆そ仁和の親王の六條理
頼朝の世に出たまふかつききよ
ふし木花完をのそうねいなし

同 同 同 同

同 同 同 同

谷ふかき山路のしをりなるらしや
いとけなけれど智恵のかしこさ
粮籾の出んとせしを引とゞめ
むかふよりぞやひらいたの幕
尋常に射る巻藁の弓
檜原には名ある侍ふしとあり
まるかさそりていふ摘らん
まるれ射やうを知ずよ弓とらま
志られぬ道ぞ武士のたしなひ

くちおしや荒帷に及ぶまじ捕れ
例はよく鯉も夜の月小さき
松浦かふちの辭し行来
ひきふまるる時の目をといふらん
氷よりあけて見事しな海鋼
牧者の稽古そ水によみえけま
哥よみといふ川も砂かむひ居て
鵜まうかしう海人丸の新
大君のおほん人々よましかりて

後まて言波よ其所西行　同
佐藤か尼公なるこそせり
西行乃出家をとめしハ花盛
詞花金葉や清く撰集　同
先師照
孫ハそれ揃とこぬき野の芭蕉
をくりし蕉猿乃月や光るらん
摂州大坂佐藤　栄甫
末代まても名字くちせぬ
楠ハ忠孫んといつしよ成言らし
摂州三田住　重香

加様の道ハよくも知る舞
紀州湯浅住　正心
月見ゆふ花脚つるひよやとられて
汗よ成りゆくつき花鞠
綸言や国乃端まて觸ぬらん
濃州山端氏　芸哉
見かよひまや作一家一門
さす人乃人を赦ぬの文をそ　同
すりし作くら乃竹もされく
踏石を済ふよ使やなるらん　同
あけちの水ハいりとなりけり

詠出雲ハ河内乃あさくい
乞ふちへむさそて手をそすり給

播州三木住五百蔵 寛政

くいそんかかりつまそいやと面かうん
たとこひとりよ坊主二人

津田次郎兵衛 屋勝

いそうこさそう左右頼朝出仕して
よそと摸と乃河風そよく

同

ちやうとう川浪ハそろ織るよ似て
花や右近乃たゝめ来る袮

美し菜花泡や黄金よ立わらん

当市郎左衛門 胤俊

むかしよりかう首そ出るらん
攘乃尾ハいつもこをこうてたまかるは

摂州大坂住 當心

いさ渡には衰小袖を下されよ
母まゝまかんゆる首我乃兄弟

但州生野中嶋氏 安永

猪捲ふをとはりさまし今もなり
かさりとて藤さら茶をひろひくひ

泉州堺住 頼廣

ふかくしくを嬉しいのりなり
熊乃ぬをのむしみをかこふ腹

摂州大坂住 行正

あふてよろこふ人乃けなりさ

幾度もあまけまたる貝おほひ　和泉郡山住　云成

いくたり見かろくと見えぬらん

荷やとりあけて人とすさま　同

愚判

あ川たる味噌を捨る妄念さ

詠しぬる舟に一字を並かねて

いつよりかひ川こ見えまけ嵯峨奥　泉州堺住　成安

清瀧川乃石亀乃くひ　同

思ひし人まかつま川ゐかな

見まくれ吉野よハ桃乃花ならて　泉州堺住　昌良

かつまくもしき松乃枝ぶり

もとハ慶ありけりそ志つらん鞠の場　泉州堺住　定宜

太郎とハやあまのるらん

浦島ハ鶴々楊枝すきこみのミ　梶山吉兵衛門　保友

小次郎ゝその子孫まてきやらん

越谷名の家ハなかりし　同

信濃路や志らし体むた旅道

ひくへて草鞋甲斐乃黒駒　同

盗人ハ尾張乃西を逃け出て
おそろしくしもかゝる大山　　同

一命ハすつると玉をかけまし
甲乃あらそうけん鉄炮　　同

蒲生嵜ノり拔云のよふして
かり西も居ゐや此鬼乃面　　同

ゆかりと歴出も旅乃道すぢ
志まりめる草鞋乃緒も結ひ久
旅織座に何とも暑さまゝかね　　春宵

洗足乃湯に水そゝひねの　　同

金銀乃いさこをさけの富士の嵩
わけまよふりようふ邯鄲　　同

往来乃志ゐに踏まよそすゝき
舟人ハ橋乃下かし西やとり　　正重

おさおもひや嫁こそ知るらすらん
笑ひくも泣くかりなゐ　　井筒係業母　栄春

文ふ手足乃はゑそかくせゐ
胤よる猫ハ福子も志けゝふて　　摂州大坂住　正隆

枝さゝむ竹の下道付くて　染不知
里乃子ともかくすゝてう
様乃髪こそ見られ前けき　寒川三田住 重香
将軍によしとも方の打まけて
かろ口ふこともいひおす祝言は
楓く滝乃ひろきこえいかい　阿引安井氏 政良
新乃月とて独むすめ自惜て
器色の宿乃さてもあ麗や　重利
よそ月ふハ抓つきとも云つ乎し

稲荷乃山をこゆる待りもち　同
降雪にちらぬまいひ猿乃室
佐野のわたりてわけ汝ふち駒　同
ゆりえなりふとも寿命去かま
まつよきハおふ賀枝子れ荒久つり　郡山池田氏 正式
わりこめれひまこそ宝よなりぬれ
さしつめて射つ志けとう乃弓　同
まふこん志やうとみゆかきりそ
繪乃具よハあいろうを引水の色　同

氷なふりして暑さまぎれん
なまくりや梨をやいと乃熨斗　同
脇乃下こそひややかになれ
章門乃灸乃あたりに墨つけて　同
石に落す海より海乃あま垂
津湄乃うらさびしくも碁をうちて　同
志かひ乃かゝたに出よ子ともら
大伴乃三升の鈴いさふまん　同
なるからふくれてのどにかかり

さられ何して料理されん　同
常ならぬ伊勢か筆下跡をふかめて
名判さへたにあらさく乃鞍

伊賀上野松氏
未交

衰さむしや俺人の袮
聞さむろや五条あたりかかり枕　同
かんに堪し孫爪琴乃曲
天人も又羽衣をかへせ　同
人をも身ともうらみこうむ孫
わかちから純くてひけをとり

勢州冨田南部氏
兼次

祖師かとこれハ又そてもなし
これひとハおかん位ありつゝ色らき
のかる手足もまゝ川思ふ乃ミ　同
弁慶らゝ寝起乃すゝ鍋ま書て
勢州松坂住　宗順
かいゐるを庭ふちるゝもおかい川るま
勢州常念寺　昌把
いいしろ猫こ乃つるそとけるる
卓散まめいころ流れなき
竹内五郎左衛門　良信
流らかすハ金銀とても石かはら
招くことふ出さへこれし

ものいはゝゆつ隊跡職相続て　同
太郎次郎まらよ三郎
忘ひすゝや毛宮ひら野ゝ秋のうん　同
流し川ちやき塩干しお附
されて不私ハ迦葉乃鍋りて
勢州松坂住　安交
道人ハ發らて相こ隊嘘あり
腹乃くゝ隊波らく種の為　同
不ら隊こゝろ乃なそて曲なさ
数ゝぬ我おもる澤にさまよひて
濃州山縣氏　蕗哉

廬山乃京氣なりひとてやせ
尾州拾田加賀氏　一甫

寐覚して雲も往する秋の夜

和哥乃みちしる人と露隊

紀の國れ名所をみるも始めて
紀州廣瀬氏　時秀

十七石乃あふや流行りぬ

九州と関八州乃知行哉
同

米は雨しられて赤くこそなれ
同

酒盛や上戸も下戸も酔ぬらん
同

武士なまとその そむ百姓

草かりしその猫足乃子孫かや
紀州和哥山住　良辰

河よむ人ハ氣をひそます

鼓うつ拍子に合をねらひすて
熊野那智山住　道諄

ちり捨れや人乃家もち

張擽よ屏風障子をこしらへて
同

とにもかくにも志めくくりそ

あつ湯や此手ハなりさ淋すて
同

見てもとく新きよかつね補るれや

墨染ぬりむらひあふ袖
紀州那智山住　如海

よろこふ中に泪こぼるゝ

ことに外産所よ焼火ふきふきて　同

大きな家も末のよゝのかれ安

湿気やと姉しきの抱へもふゝし　武州江戸住　古韋

はふるハめいハまくあかし合點して　同

地震よかむも持乃かけ

かけ出す跡乃足くなるんなやくして　同

大返物乃袖にゆハしさ

ふゝき侍へを他へハあるすか郎　武州江戸住　吉言

井とより乃水をかけひの庭坂ち　敦賀中村氏　正次

心をもまなへ入道乃館

小鳥ハよにあらくひろき実抱　同

おそろしくも脳袋ハまたに劣らめや

かちせあまへと見世乃唐本　同

馬よりもへ落つあやしさ　越前福井住　塞童

旅ころも日を八ツ時よ定見して

かんえてハくれ隠もてハみえ

あしたやふ宿まさされ蚕の飛まはり　越前福井住松氏　良卿

兄弟に逢ふハ拙しさかけ抱
正宗乃揺揃れ奴ハうちこわし
そもしおくくもあろ足髪
同
及古もてつくれる児乃いゝのかり
越前福井住
竹雪
ろふもよろこひおすとよろこひ
いと惜しさ娘と嫂乃産なして
越前福井秋山氏
方竹
毒らしき物をハ思案してくらひ
おさこおひり乳をもりの生
越前福井山元氏
重直
乞食れ施ハせふことをさしまつて
毛乃かゝきを締らぬやさしさ
越中高岡江守氏
隆晨
幸介ゝの八通らまとも世ぬ関守ら
昔ありあふ坂乃山路さるく
越後柏崎妙行寺
日折
是くれと心をうつす川すゝこのミ
とける絵乃具ハとうん緑青
同
あけまきのかゝくさんと乱髪
風よ障子もこすとやふ縁
越後柏崎住
杣都
初ことのちかの乃さそいふせさ
絹画し象ハいよしふとりかて
丹波氷上郡土巻
重成

白おしハふよ川と流し出よ名り
児玉三郎兵衛
貞利
志もちたを織ぬる人のすそみそて
寺かし里へ人流の上餅
頻悉ハお児乃親ろり頭け出
丹州福智山住
吉英
のありきほよハまう刹ね人
川舟ハ下流そろりを示作みて
但州生野中嶋氏
安永
唐まうりも巷心もとなきさ
うき流ゆる志りぬあるこの腫抱ふ
日

哥仙誹諧乃内

大ふなり持まゐりたうかます
幾年往来す添鯨流こさ
日
ゆつくりと涼を請る家老衆
但州生野松本氏
吉屋
歎う流悉き事そうましさ
此ころハ冨貴乃家と教らん
但州生野長嶺
業秀
軋乃すこりさりくさう
討しと貝とそへましき名り
但州生野寺田氏
豊運
いそ咎りと武田乃幕ぬ紋付て
猫居よ敷帳を弱て葉を

のこけるとて
數屋乃内にて茶をそゝおちかふ
とふ前るを出しなれとも
作病ハとかく乃尾なりとさらむるよ
但馬生野竹屋氏　勝利
猿まハおもひの外よすりきりね
墨筆志けく川りふかく旅
志りぬかるも筆乃あやつり
播州姫路住氏　交云
綸ありて文殊やたかく寛ぬらん
加茂川の方遠より馬を乘かへく
月

栗田口よりもすゝむ先陣
月
いよ氏山家乃住居云合さ
ありとあるてあまてもみゆるむるすれ
播州姫路西山氏　奉重
是生め川ると撞そつきけ傍
狂競なまとより人をたくかくて
播州賀古氏　勝盛
くり川をハいりよ此甚乃とれ
あんさくふ守球かくまハかけらし
播州姫路壺見　正舎
けいせいは何ともかとも吹上て
金山より乃かへりまくく
月

さしくの暑さをも身にしみれ果
虫病よなまとは灸もいらぬさもす

播州三木なな寺 真隆

よろこひ乃中ふ流すや血の涙
うきふ乃腫うふやりてさく

播州二本五百蔵 之政

やゝさしと河辺ここなる水をいま
うかし乃桶にふろしめてをく

播州姫路正善寺 末云

下帯はこちからもちへとさし通て
あつろやまちさま風呂をふるまふ

井前八左衛門 政舎

鳩乃なくはいかなる事そ笑ゆる
ことの外胸乃痛みやをさまらん

讃州上柳氏 頼心

命乃かとはすんもあらしふ
志れく乃むしつよくも腹まこふりて

京平山氏 心月

新しく本には打ち幣をさし
急く書積乃すまふ乃上棟

京西村長内 忠勝

いまも戻りをたくはへそかね
猪はたゝ毎ふたくさ出しつらん

池小路若井氏 秀鶴

海上やとく〜ふかもあれねん
珠とる人を守る修羅王

京平野氏 空良

うふてこそハさけを飲ゟ迚
詩乃會りおもふたゞちゝより合て　東二条住 宗吉
六尺やと稀くしけふみえねらん
墨繪屛風乃松そいく絵哉　同
さゝへぬりおりれふゝきのいろり
さてと手際明目黄笋し　京大宮氏 元実
浮世よりとなれむ君ゟ代
討死と思ひしりし又勝軍　東七条次木氏 宗眞
人おとこりき拙ハおくしふ

うしかよ乃けを好ミそするやし
勅撰乃和言を援ふしぬちらひて　寿類屋 政信父
又ふや諸國よりおゐきさ名あ
馬ふのりつくさつ哉 討死　政信
おめらるゝ将棊ハさて碁ま宮け
虎乃やうなり大せいさそある　同
又つ迚碁乃中よりつまさ作れふし
母乃めされしきねそいろゝなき　同
目ふたてゝ哉おゝけ哉着ハ平家方　同

具足をぬきさし袖をしそおよ
くゐさやくをすゝりとかぬき捨て　恵佐
腸抜ハくゐいかひくんと持ちまつし
弓乃弦ゐりわかりつゝるふ　同
蟹持ハ鳥瀬りいやしき生附
めしよへるそてたくほとやいふ　同
旅いふとゐすく志ほゝ密夫
銅壺しあふむ乃ゑるれ声ゐて　同
綿ふゝね袖ハ秋ふうめよそぼす

生者よりすけほさふかく　同
扇ぎ川さり霧出ほなり
声ありつゝ猿ハよくこそ仕合れ　同
殿中に鼓乃ゑれゑくして
いかつよ袖をいつほ　判友　同
をゝほ火鉢ありし用心をせよ
猫乃すくゝ脊を串よけし立て　同
嫉しくも漆よ付し弟子とも
数乃たゝうをいほゝ　兼讀　同

川岸も浮さりまとハこゝろして
舩賃ハさけハ舟ふのりもせ渋　喜地氏 可頼
近江路乃廣さハ二十四郡ふ　同
目ありつく物ハひゝひと川ま川
ひとり法師乃あハれふるまひ　同
橋掛ありたてゝ味方をとゝさえ
雞なく畑をうちすましたり　同
時節の鐵乃鷹巣乃城せめて
名ハ名おとある侍そう

勝ありのるそれ梶原の軍船　同
名ハ澤ありけり芦ハ菖えしう
あれ水上りおりて古足袋　同
おとらぬ慈悲のたまふかし
さしあて勇進ひしやく座わけて　同
庄以乃君見庄配おりしき
志升あひて酒友達ハこうしめせ　同
かうふけぬ禄ハしたゝう
かをうともくるて山路ハこえうてと　東山大谷 実元

他乃おもひくとちらふわら中　李吟
あまゆきハさもみくかゝねまて子せ
日傭かくらんといひてあつされよ　同
飲食乃おそろしいこそれしなは
ひ川りりとせしうられこそいろ　同
とろなる神かときけらすひまて
みそりの物とてさくめかすぬる　同
亜衣婆や川海く新乃わつらひよ
兵ときゝみくさまよし　原北中　同

よろなれとしきやりくさつと高鳴て　同
絵みちやようそ似たる海つら
高ふきうく屛風のうらハ花かとよ　同
我飯肉えりはく谷川
いろうしよのまてことくいん手判ありや　同
知りそくおりひ凡外よ語りて　貞室
日ろひとりしやよき甲頭
くさめくと鼻ひとひ添人　同
やいとをやくふの咳のとの守らん　同

はくるしやに薬合の小袷
志川のりと膚につけたる紙袋　同
ところれあるひとりて旅人　同
人形のことは紙に記しけり
あやし甚の虫の古き代　同
いふし〳〵の覚さんのまゝとして
酔つふれてと酒をのみしかな　同
百姓の軒ハもとより田家にて
貧なる清水の竈さひしき　同

袷ちかへて飲しハ夏の二日酔　同
綿ならて新のちゝこもりゆき
ちゝみれ地蔵ハ河原沙せし　同
剃こそしおふし小あつて綿きせて
地蔵わさまハされけりそさます　同
千話ふこもうくや閻魔の爺つひ　同
敷料とし又声のいろ川さ
いちのせにちそれ牛るハかりせまひ　同
うしろは志やとおふそにらけると

涼しさやとられて後にたてるらん　月
とまりゆく鳥こそなかりますぞ
森のあかりける気やあか　月
ひらめくさてなる神南海の山つき　月
ふしさやなるをつくるれまつらひ
金坂や八坂て鎗をかざして　月
加賀路りつけハあかる舩頭
禰ためし鉄炮鎗の荷をおかけ　月
茶匙とるやわらんかんの被的号

ちくさつきにかゝる藪醫者　月
初雪に菜ことれ家やめしつえん
わ山りすむ東やまとの　月
まつ手にすゝに流れる祇園海
流ハ通をえらけたまれ　月
拾ひわ子繰ハ子にえそふらし　月
坐禅乃床乃眠さます那
ゐまかへをつけ御しる方よ
てんかくもとく出すや粟飯　月

せうろくをもさ乃ゝかまや成
有ゝ中にう州しるきたく高ろ　同
日本記をゝくらひゝそりか垂らん
むらさき式部さえ此ゝうさよ　同
文教ゝりしむゝうきき乃上
志らしめる鍋乃あたらわすれめや　同
蜜つゝハたとすへもとろ汁
け帝にみえね油や酢や酒や　同
ひつて蚯蚓ハ乃ゝ字なりけり

あかまあめり湯ハふえ釜氏ん〳〵ら　同
戸たてゝよせぬ人乃強面さ
見鳥乃あしそて鉄もしも〳〵これ　同
自由ふハなら〳〵ゆひのいへか絶
そうしめて筆を使なるゝ時　同
自らけそのかろ名上高人
無さとらやいるゑ此棹秤さね　同
具足乃襟乃盞ぞそりめう
高館や亀井ゝ部や江田のさて　同

手輿をかゝせてやすむ庭く
目くまふといふハ毛馬の湯あかり 同
志ちさ法師のちるそかゝまる
豆腐をにくりてわしをく摩耶ま 同
かつまうとの矢よもつてさゝゑり
孝行をつくもし独ハたゝふちて 同
ましく文字より韻をまて小絃ん
そかめて袖まよりてる揩擦ま 同
きんかりとそやすハ宗治の条ふて
うるさのすしハのせね狙板 同

賀

よめ屏風の哥そめてたき
優なるハ宮ふ代御賀の庭ふて 見山三吊芸菓 限光
玄竹ゝはる臺乃くすし
鶴亀と亀ふ敵の元服なり 恵佐
我のあるへそうゝやまれぬる
莖若なるふそし八そしいされて 貞典

二川乃烏賊を賞翫すとて
孫彦乃生れて後五十日　知足

草も木もなびきした三笠山
あめがしたよ御代ハ萬歳　貞室

玉海集跋

夫玉海集余先大考貞徳以崑山集爲前集以此集欲爲后集然撰輯之功未闋而日薄西山氣息奄々歘嬰疾病既在牀蓐當易簀之時囑高弟貞室曰必繼吾事撰此集而可續其功矣嗚呼貞室者傑出于誹于諧既

歴年所編輯之功関焉彼海底
之明珠有韞於崑山之玉石歟
因以爲跋
明暦第二稔孟春穀旦
講習堂昌易謹書

[illegible]
[illegible]治[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]日本武の尊
[illegible]贈答[illegible]

当とし此その頃誹諧と
おもきを俳の和らしめ
弘誓結不思らは法を此筆に於
地獄を侍る牛頭馬頭結むまゝ
出家にと明の誹諧にて外の石
ふかき安楽に吉田の年いは経
よろしからず安らかならずおも
をく繹し侍し字私師貞徳

翁の法のもとをおもんじて、すゝ
み世にありしより壮年のころ
まて秋山翁に来り翁にて
をとめきぬくにて花は
ほ不可翁は水上をとつまてを
法きゝをのれを書くらにして
風雅のさいを世と書し阿
まつよりひの末に三集を安

先生嵐山を既に公築出たまへし
名を玉海とはまいはれひらかれ給ひ
して専やさんなる清きのはしを
奴におもほせ給ひし五調なる然
傭夫よりも出きたりし生のへ
米様を師命然そむきし集
金にはまさ絵子地をも伝
してうらしよき然はる風雲

流のいさん焼野に草絶落なり十
めでたき去業なれは巣作るあるを
人異にして句をひらし栄たるひ
安なるをとく遅くもてなし
仍も愚なるところ然るよりえ
一家をかへて傍し耳の字
因のものに数をすへて来れ
謂はそへてゆるしまうたよ

三河のくにゝいまはてたかし
月志まし給ふくものかしら給
くら葉なきあきらす誉られ給
古紙にめてかくもちろ侍しなをのく
こちらめく雹つゝらく私きとて
古のかはせ勢人よ给ともはくらき
きのあ給安郷にかおほくの集に
とらせ風侍しなきちとしいまた

このちるみおほきさきとそら
ひなた侍き侍る平身給ふもいた
いや思おめひ郷し侍るはまけて
羅ゆるしるをひよなき給ひなま
ほまさこそおほの秋を筆こ
しのまれをたのくひして
やこ奴

一嚢軒
貞室

明暦二年丙申八月吉日

敦賀屋久兵衛開板

七巻ノ内